

平成4年10月18日(日) 第18回 越谷市民まつり
越谷市郷土研究会展示発表用資料

増林の地藏尊

小原 勸三郎



古利根川沿いの増林・上組地区。

石造の地藏尊で一八四九(嘉永二)年に地区の念仏講によって建立された。高さ二・四尺。市内にある一九四基の

地藏の一つである。大地の恵みを神格化した菩薩が地藏菩薩である。釈迦入滅から弥勒仏出生までの五六億七〇〇〇万年の間に、衆生済度をうけもつ菩薩として、奈良時代から信仰されたが、もとはインドの神であったのが仏教にはいったのである。末法思想のさかんだった平安中期以降、地藏信仰はとくに広まった。

江戸期には延命・子育・身代り・とげぬき・疱瘡・いぼ地藏などの現世利益を与える存在ともなった。また、とくに幼児の救済者とも考えられ、水子供養・賽の河原の地藏ともなった。赤いよだれかけをする地藏が多いのはそのためである。

上組のこの場所は、溺死者・疫病死者の火葬場の跡ともいわれている。市内には、かつて女性の講の発達がいちじるしく、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念仏講と、女性のみの年令階層による講が多かった。

女講中(写真)とあるのは、定かでないが、林泉寺に今も続く女性の念仏講(お姫講ともいう)とつながりがあるのかも知れない。

1. 庚申塔とは何か

人間の体の中に潜んでいる三尸と言われる三匹の尸虫が、六十日に一度やってくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりする。それゆえ庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならないという。そこで庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす『庚申待』という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔とである。江戸時代に全国津々浦々で庶民の間で盛んに行われた。

2. 庚申塔の主な型式

寛文年間（一六六一〜一六七二）頃から庚申塔の建立が目立ち始めると同時に、青面金剛と呼ばれる仏様を描いた庚申塔がよく見られるようになってくる。そして元禄年間（一六八八〜一七〇三）の頃になると、庚申塔建立の大ブームとなり、この頃、『日月・青面金剛・二鶏・三猿』の型式が完成する。つまり、中央に青面金剛像、上部の左右に日月（太陽と月）、下部に三猿が刻まれ、中には青面金剛の両側下に二鶏が刻まれていることもある。庚申様と言うと青面金剛を一般に指すようになるのもこの頃である。

青面金剛は怒りを込めた顔付きで、腕が六本もあって、そのうち四本の手には左右に弓と矢、輪宝（車輪の形をして八方に矛先がでたもの）と矛を持ち、中央の二本の手は合掌したり、右手に剣、左に羅索（一種の綱）を持っている。中には羅索の代わりに女性の髪をつかまえて、その女性をぶら下げているものもある。

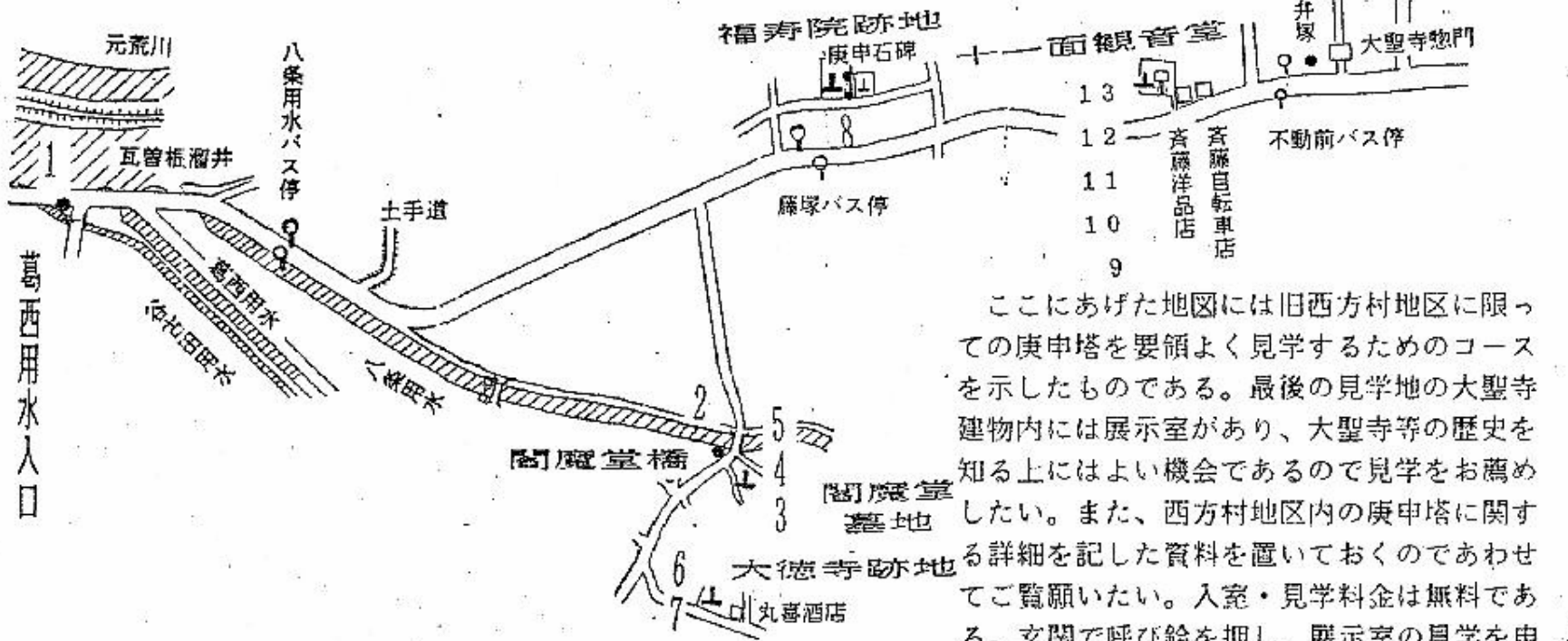
江戸時代後半になると青面金剛像を描いた庚申塔の他に『庚申』とか『庚申塔』『青面金剛』という文字のみしか刻まない文字庚申塔も見られるようになる。後にはN. O. 17のような文字庚申塔を百基並べた百庚申信仰も出てくるのである。

なお、N. O. 8の庚申塔の近くに、題字が『青面金剛上師十哲願定朝之御作』と刻まれた青面金剛のこ利益を記した石碑がある。必見に値するので紹介する。

旧西方村地区 (一部)

旧西方村地区に散在する庚申塔めぐりコース

越谷駅 (3番のバス停にて吉川車庫か吉川ネオポリス行きバスに乗車) → 藤田病院前バス停か一つ先の八条用水バス停下車 → 葛西用水入口 → 閻魔堂橋 → 閻魔堂墓地 → 大徳寺跡地 → 福寿院跡地 → 十一面観音堂 → 大聖寺 (不動尊) → 不動前バス停乗車 (越谷駅行き) → 越谷駅

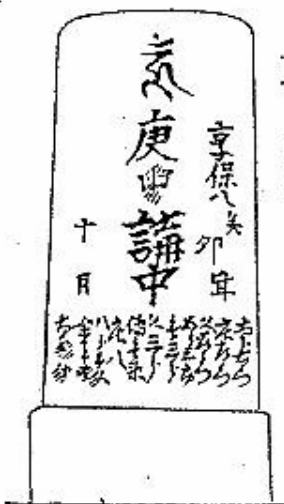


ここにあげた地図には旧西方村地区に限った庚申塔を要領よく見学するためのコースを示したものである。最後の見学地の大聖寺建物内には展示室があり、大聖寺等の歴史を知る上にはよい機会であるので見学をお薦めしたい。また、西方村地区内の庚申塔に関する詳細を記した資料を置いておくのであわせてご覧願いたい。入室・見学科金は無料である。玄関で呼び鈴を押し、展示室の見学を申し出れば見学ができる。

葛西用水取入口

約十層

享保八年（一七二二）



大徳寺

約十層

寛政九年（一七九七）



間廩堂橋

2

約十層

文政七年（一八二四）



間廩堂墓地

3

約十層

享保七年（一七二二）



十一面観音堂

9

約十層

寛政十年（一七九八）



福壽院

8

約十層

明和九年（一七七〇）



7

約十層

寛政十一年（一七九九）

4

約十層

明和七年（一七七〇）



5

約十層

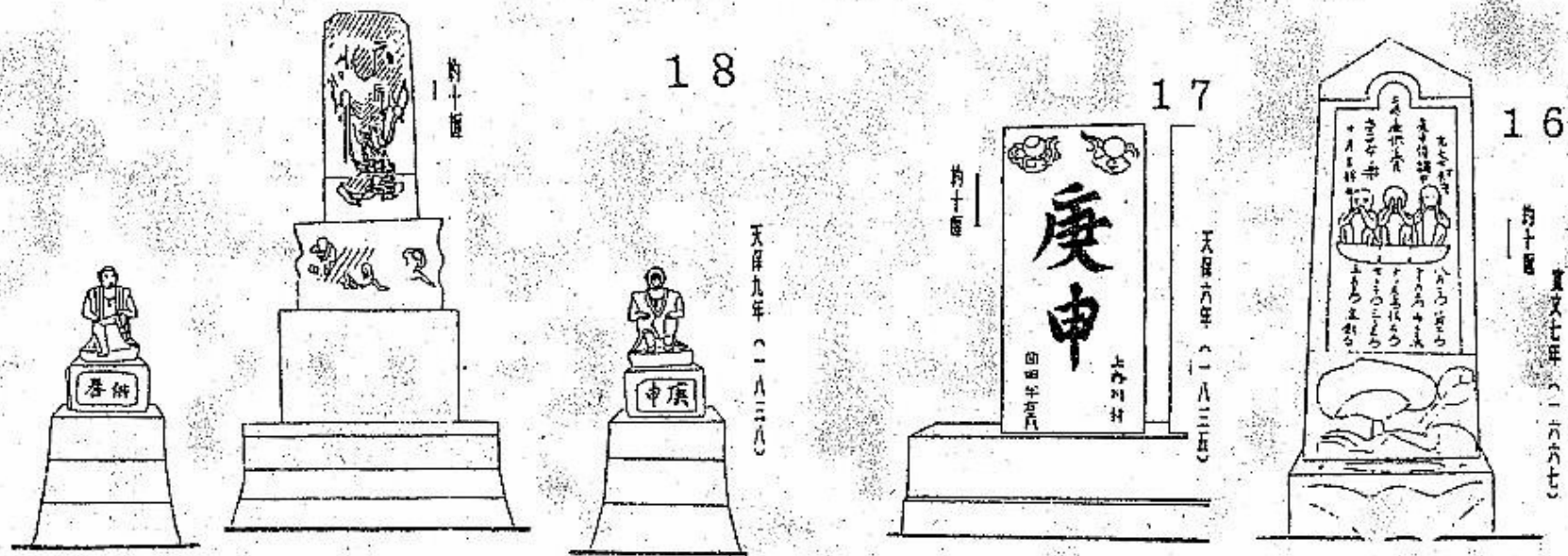
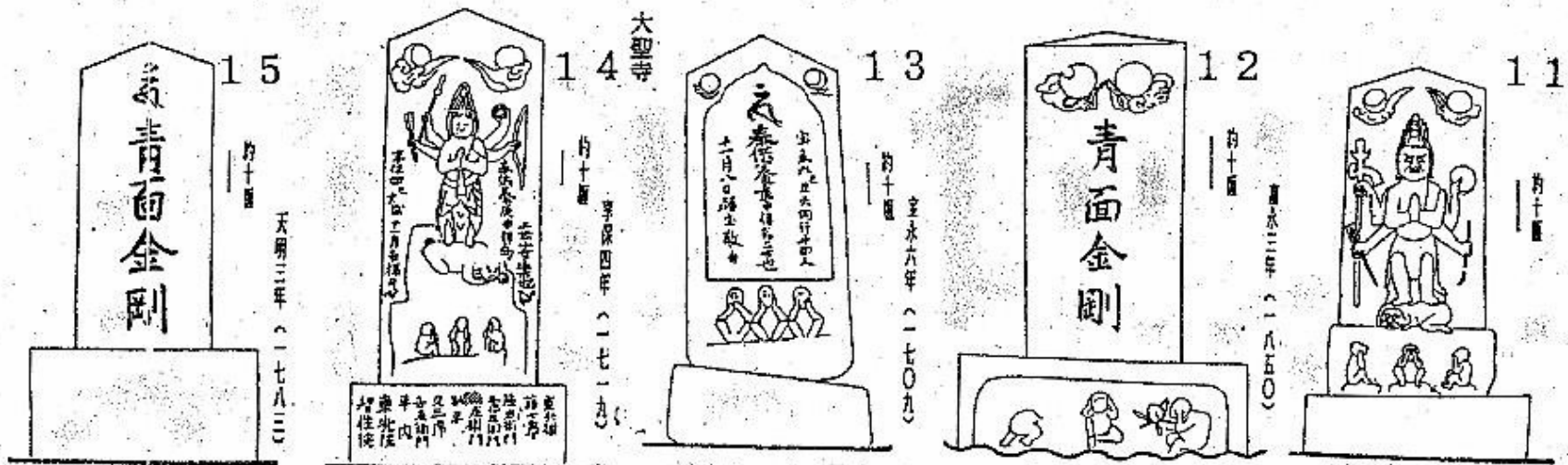
宝暦九年（一七五九）



10

約十層





図録 1 道しるべを兼ねた文字庚申塔（「庚申講中」）

向かって右側面には「これより上ちおんじ三里はん」、左側面には「たび入の道しるべもかなしるし石」と「もちはくちせぬのりのかよいち」が刻まれている。また、裏面には「これより左吉川老黒火かがみ門」と「これより右市川まで五里」が刻まれている。このような道しるべを兼ねた庚申塔は元禄年間頃から出てくるのである。上部にある梵字のウンは青面金剛を表す。

図録 2 文字庚申塔（「青面金剛」）

「庚申塔」とか「青面金剛」と簡単に文字で刻まれた文字庚申塔は江戸後期に多く見られるようになるが、これもその例にもれない

なお、この庚申塔は慈恩寺・越谷、不動尊、草加・江戸への道しるべも兼ねている。

図録 3

造立者がすべて女性だけという庚申塔は全国的に見ると珍しい。図録 8 と図録 11 も同じである。

図録 6

三墳の見鏡が持つ扇子に描かれている日の丸の部分に朱色が塗られているのがわかる。この庚申塔を奉納した秋山家は西方村の山野組の世襲名主を勤めた家柄で、その後も明治初期に戸長などを勤めた。

なお、大徳寺は今は墓地が見られるのみであるが、西方村の山野集落の人々にとって心のより所となっていた寺院である。

図録 8

この年の二月に江戸で行人坂の迷惑（明和九）大火があった。この塔を建てた女性達も大火のうわさを耳にしていたことであろう。

庚申信仰に関する石碑

天保九年（一八三八）に建立した青面金剛の御利益を記した石碑である。一から始まって十まで紹介されている。必見に値する。この石碑を建立した野山は大聖寺境内の惣門西側にある「良井塚」の碑も建立している。

図録 9 文字庚申塔（「清明金剛」）

「青面金剛」と刻むべきを、清く明るいという意味の「清明金剛」としているのは珍しい。風変わりな文字庚申塔といえる。

図録 14

造立者のうち、「半内」は西方村名主（現、相模町六-二五六の須賀家）であり、「東光院」（現、日枝神社東隣一帯の空き地、相模町六-四九一の浜野家）は西方村の旗守である山王社（現、日枝神社）の別当寺、「智性院」（相模町六-四六三の石垣家の屋号は「知性院」なので、このあたりと推定）は大聖寺が支配する寺で門徒と呼ばれた。

図録 16 初期の庚申塔

この庚申塔は板碑型である。この型は江戸初期によく見られる。中央には庚申塔には付き物の三類が刻まれている。信仰の仲間組織のことを寛文年間頃までは「結衆」と刻まれていたが、この頃から一方では「講中」と刻まれる石塔も見られ始める。この庚申塔はその例である。

図録 17 「百庚申」

百庚申は本堂の裏手の民家が立ち並んだ辺りの小河内家西隣にあった。ここには小山があって、中央には一丈（約3メートル）余りの庚申塔があり、それより左右に本堂に向かって二段ずつ「庚申」と刻まれた文字庚申塔が百基程並べてあったという。現在は昭和二十年代に既に東門に通じる道の両側に並べられてあり、九十七基現存している。一丈余りの庚申塔は天保九年に建立されたものであり、平成三年に本堂裏手より現在地に移された。

石塔中央に刻まれている「庚申」の文字に朱色が塗られていたことが、いくつかの庚申塔に朱色の跡がはっきりと残っていることでもわかる。

石塔に刻まれた奉納者の村名を見ていくと、武州大相模不動尊（大聖寺）は、広く周辺各村々の間に厚く信仰を集めていたことや、大相模不動尊の信仰が江戸にまで知られ、本所・柳橋・深川などからも参詣者があったであろうこともわかる。

一方、増林村の村屋護兵衛という人が奉納している庚申塔もあるが、これから増林村は当時は染め物業や晒し業がさかんであったことが裏付けされる。このように庶民の生活等の歴史をつかむうえで多くの謎を秘めた貴重な資料といえよう。

図録 18 「百庚申」

「百庚申供養」との文字が刻まれているこの石塔は、これが造立される三年前に百庚申信仰に基づく百庚申の石塔が奉納されていたが、その百庚申を統括するために造立されたものである。

大分破損されているが、欠けずに残っている輪室（部分）や鬼の顔がとてよく描かれ、それに三猿のうち中央の猿は男性の性器が、副猿は扇子を持って耳をふさぎ読書をしている姿が描かれるなど細部にわたりよく彫られ、優れた石塔であったと思われる。

なお壁にある「庚申塔青面金剛移転宮緒由緒」の石碑を紹介すると、「明治二十八年本堂大火災にあい、なおまた大正十二年の関東大震災等に遭い、その破損ははなはだしきものなれど今なおその形像を残している。しかるに今元荒川河川改修施工中その区域外とは言え倒壊寸前状態の当本尊を移設葺きせしものなり。平成三年六月吉日 國家安穩 人心安寧 当山第四拾世 弘進代」となっている。

図録 19

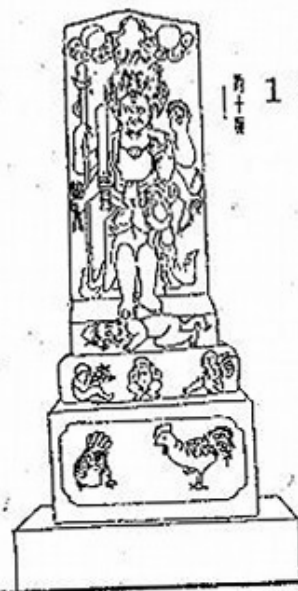
百庚申信仰の「庚申」と刻まれた文字庚申塔（天保六年）や「百庚申供養」と刻まれた百庚申供養塔（天保九年）のあとに造立された庚申塔である。また、相尋院墓地には青面金剛の御利益を記した石碑「青面金剛上野十誓願定朝之御作」（天保九年）も建立されている。この頃が大聖寺にとって庚申信仰の鼎盛期といえようか。

図録 19については、細部にわたってよく彫られている石塔なので、詳細を述べたいと思う。

この庚申塔は上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央

の六本の腕を持つ青面金剛は鬚髪は炎のように逆立ち、その中にとくろを巻き鎌首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三日月となり忿怒の形相をなしている。胸には純羅の首飾り（瓔珞）がある。また、各手には弓と矢や輪室、三つ又の矛・剣を持ち、女性の髪の毛を掴まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。ただ、女性の顔が約百五十年間の風雨に晒されて摩滅しているのが残念である。足下には鬼が踏み潰されている。この鬼は手足の指がそれぞれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。山王信仰の影響が如実に現れている。向かって右端は御幣を持つ見償。御幣は神の依代である。この部分が神仏混合となっている。中央の言わ猿は躰が見られ、その下の陰部も表されていて淫褻とわかる。陰部に朱を塗り、下の病を治そうとする信仰のあらわれであろう。今と違って当時の性に対するおらかなさが窺われる。左端は性欲の強い動物とされている猿が女性の臀部を透視させる猿を持つ副猿。挑持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下の病の折願の対象となっていた。二猿は普通は青面金剛の両脇の下部に描かれていて、中には何の鳥か判明できない程に簡略に線刻されていたり、あるいは全く刻まれていない物も多く見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立して、しかも細部まできちんと描かれている。

以上から私は、この庚申塔は江戸時代の庶民の風俗や信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にも優れ、他には見られそうもない庚申塔であると確信している。



天保七年（一八三六）

郷土の昔を旅してみませんか

越谷市郷土研究会への布告

当会は昭和四〇（一九六〇）年、発足以来、史跡めぐり一九四回、研究発表会一〇六回を重ねてきました。多くの仲間と昔の旅人になってみませんか。

史跡めぐり

緑のかげの中を、仲間とよもやまを語りあいながら、先人の遺した文化財を訪ねます。

夏・冬を除いて年間八回。原則として毎月第四日曜日。

日帰りのできる関東一円をめぐります（東海道品川宿・古河・鎌倉など）

越谷駅・南越谷駅で集合・解散です。

研究発表会

先学の方や会員の日頃の調査・研究を仲間たちに知らせます。
年間三回 第四日曜日の午後。

会報の発刊

平素の成果や思い出話などを集録します。会報『古志賀谷』発刊。

越谷文化連盟

市民まつり十月・市民文化祭十一月に毎年参加しています。
会員の日常の研究を写真・地図などで展示発表します。

古文書クラブ

祖先たちの日記・紀行文・契約書・訴状・生活のようすなどを、皆で読みます。人々の哀歓が、行間からきこえてきます。

その他

初級ていど。毎月第一土曜日・第三土曜日 午後 中央市民会館
けやき学校歴史散歩教室 老人福祉センター「けやき荘」へ講師派遣。
南越谷公民館へ講師派遣。

入会のおすすすめ

祖先たちの生活のようすを知り、文化財を訪ねながら、仲間の輪を広げましょう。

入会は電話でも葉書でも結構です。なお会場でも受付けております。

申込先 越谷市宮本町三の一七の八
谷岡 隆夫方 越谷市郷土研究会
電話 (六二) 七五二七

金費

年間二〇〇〇円 (会報・諸案内状・諸会議費など)
史跡めぐり その時の費用 (交通費・資料代・保険など)
研究発表会 その時の費用 (資料代など)